

## 観光フォーラム

## アトランティックシティ物語

## Rise and Fall of Atlantic City

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学観光学部

アトランティックシティは、アメリカの大西洋岸にあるリゾート都市で、アメリカの中部にあるラスベガスと並ぶカジノの街として有名である。しかしラスベガスが現在ではとりわけ世界一のエンターテインメントの街（The World Capital of Entertainment：ラスベガス市のスローガン）として栄えているのに対し、アトランティックシティは衰退傾向にある都市となっている。

最近、日本ではカジノが都市振興の万能薬であるかのように主張される傾向にあるが、少なくともカジノはそのようなものになるとは限らない。本稿は、アメリカにおけるその有力な一例を簡単に紹介し、大方の参考に供するものである。なお、参照文献は末尾に記載し、典拠箇所は本文中で示した。

アトランティックシティやラスベガスなどにおけるアメリカのゲーミング事業・ギャンブル事業全体の近年の動向や問題状況などについては、大要を別稿（文献①）で述べているので、詳しくはそれを見ていただきたい。本稿はいわばそれを補足し、アトランティックシティについてこれまでの経緯や現状などについて管見するものである。

アトランティックシティがアメリカ大西洋岸の美しいビーチの街として注目され、同市において最初にリゾートホテル的な本格的商業ホテルが生まれたのは1853年であった。翌1854年には近くの大都市フィラデルフィアとの間で鉄道が開通し、当時（少なくとも1874年まで）平均して年間約50万人の乗客があった。アトランティックシティのシンボリック存在である“ボードウォーク”が最初作られたのは1870年で、1994年のハリケーンで大半が破壊された時には7マイル(11km)に達するものとなっていた。

アトランティックシティが隆盛を迎えたのは20世紀になってからで、特に1920年代は黄金時代であったといわれる。ところがこの時代は、アメリカでは全国的に禁酒法が施行されていた時代（禁酒法施行は1919年から1933年まで）であった。この時に同法を犯して酒の密売を行なったのがギャング団で、ナイトクラブやレストランの奥の部屋（speakeasy）などで、飲酒や賭け事が行われた。

当時、アトランティックシティではこうしたことが当局関係者の黙認のもとに行われたこともあったといわれるが、例えば同市

のギャング団のボス、ジョンソン（本名はEnoch L. Johnson：通称はNucky Johnson）が当時得ていた収入は、年間約50万ドルに及んでいた。他方、アトランティックシティは“世界の遊び場（World Playground）”という盛名をはせた（以上は文献A, pp.2-3による）。

こうしたギャング団の横行は、当時は他のギャンブル・リゾート地でもみられたが、ラスベガスなどではその後連邦当局や州当局などの取締により全くといっていいほど排除された。ところが、ごく最近、2010年にクニーゼル（Kneesel, E.）らによって発表されたところの、アメリカの主要な4つのギャンブル観光地、すなわちラスベガス、アトランティックシティ、シカゴ（シカゴランド）、コネチカット（主としてフォックスウッド・カジノ）についての一般の人々の意識調査によると（文献K：詳しくは文献②）、アトランティックシティは「治安・安全性（safety and security）」や「家族で行ける所（family appeal）」などの点で4か所中最下位の評価となっている。それだけではなく、さらに当該観光地について思い浮かべるイメージについてみると、アトランティックシティは、他の3か所にはない「怖い所（scary）」や「汚い所・みすばらしい所（dirty/seedy）」というイメージが比較的高い割合になっている。

これらからみると、アトランティックシティは、ラスベガスなどくらべて、一般大衆向け観光地に転換することにおいて遅れをとっているという感じがするが、これにはアトランティックシティの、特にカジノ開設にかかわる歴史的事情が大きく作用しているように思われる。結論を先にしていえば、アトランティックシティのカジノには、衰退傾向にあった同市の繁栄を取り戻すための手段としてかなり強引に無理やり推進されてきたという“原罪”のようなものがあり、それが今もって影響しているものと思われる。以下、この点に焦点を絞って経緯を概観する。

アトランティックシティが観光地として人気落ち、衰退傾向に陥ったのは、概ね第二次世界大戦以後においてであった。その原因は、衆目のみるところ、アメリカにおいて自動車（マイカー）によるツーリズムが広まり一般化したことであった（文献S, p.246）。それまで主流であった鉄道によるツーリズムは凋落し、長距離ツーリズムもバスが主流になった。

アトランティックシティの場合、第二次世界大戦まではツーリストの圧倒的多数は鉄道を利用したものであった。同地における滞在も比較的長期で、一週間ほどの滞在客が多く、かれらはビーチでゆっくり楽しむ以外に、街のなかを散策したり、近辺の景勝地、メイ岬 (Cape May) に出かけたりしたものであった。

しかし、マイカー・ツーリストたちではアトランティックシティに來ても滞在期間は短く、長くても二、三日というものが増えた。マイカーでは移動が簡単にできることもあって、観光地に魅力がないと、容易に退去し、滞在期間は短くなる。滞在の仕方が、これまでのツーリストと一変したのである。

こうした変化に対応し、アトランティックシティでは、ツーリストの滞在期間を長くし、観光地としての衰退傾向に歯止めをかけるために注目されたのが、カジノの設置であった。

別稿 (文献Q) で詳しく述べているように、アメリカではカジノはもとより、宝くじ (lottery) やスロットマシンを含めギャンブル事業 (アメリカでは一般的通称的にはゲーミング事業 (gaming) という) の公認のいかんは各州の権限で、ラスベガスのあるネバダ州のようにギャンブル事業が盛んな所もあれば、ハワイ州やユタ州のようにギャンブル事業は一切非公認という所もある。

アメリカでカジノが公認された最初の州は、ラスベガスがあるネバダ州で、1931年のことであった。2番目に公認となった州は、アトランティックシティがあるニュージャージー州であったが、その公認は1976年のことで、しかもそれはかなり難産のもとにようやく実現したものであった。

実は、ニュージャージー州でカジノ公認の可否を決める住民投票が最初に行われたのは、1974年であった。この時にはかなりの可決楽観論があったが、しかし公認案は3対2で否決された。そこでカジノ推進派は、2年後の1976年に再度の住民投票に持ち込んだが、この時には、カジノ設置はアトランティックシティに限ることが明記されたばかりか、可決のための運動費として約100万ドルが投下され、さらに“政治的雇兵 (political hired gun)”も大量動員された。こうした強引な仕方に対しては、当時の州警察本部長 (The Superintendent of State Policy) すらも看過できない (unbearable) と警告せざるをえないほどのものであったが、こうした強引な運動により1976年にはようやく可決となった (以上は文献S, p.249による)。

ところが、実際にカジノ設置申請が行われたのは翌々 (1978) 年1月で、それも僅か1件であった。他の開業予定者たちは洞々峠的に様子を見ていたのである。一方当時同市では、カジノ設置に適した所で地価騰貴が起きるとともに、古い家屋において“原因不明の火災 (fires of unexplained origin)”が起きるという“変事”があった (以上は文献S, p.250による)。

こうしてできたカジノが同市衰退傾向に歯止めをかけるものになっていないことはすでに種々指摘されてきたが (例えば文献M, p.132)、なかでも特筆されるべきものに、1996年アメリカ連邦議会に設置された「ギャンブルの影響調査のための全国委員会」 (The National Gambling Impact Study Commission: NGISC) の

最終報告書 (文献N: 1999年発表) がある。

同報告書は、とりわけアトランティックシティについて、例えばカジノが開業された1978年には、居酒屋 (tavern) やレストランとして311店舗があったのに、20年後の1998年には66店舗を数えるのみとなっていることを指摘するなど、具体的なデータに基づき、結論的に「少なくともニュージャージー州の場合、カジノ推進論者たちがカジノ開設により生まれると通常主張しているようなメリットは、ないものと言わざるをえない」 (文献N, pp.7-11) と記述している。

アトランティックシティの場合、以上のようにカジノは、同市の衰退傾向に歯止めをかけるものとは全くなっていないばかりか、近年ではカジノ自身の前途も危ういものとなっている。例えば、同市で12あったカジノ・ホテルのうちの1つ、“Atlantic Club Casino Hotel”は本(2014)年1月13日倒産し閉鎖となっている。

AP通信のパリー記者 (Parry, W.) は、昨 (2013) 年12月30日に「アトランティックシティ・カジノは改革するか、新しい競争に直面するかの運命にある」 (文献P) というタイトルの記事を書いているが、そのなかでニュージャージー州知事、クリスチー (Christie, C.) が、同州としてはこれまで考えられなかったような方策をとらなくてはならないと声明していることを報じ、さらに (本年2月以降) 残っている11のカジノ・ホテルのなかでも“Revel Casino Hotel”はかなりの赤字経営となっていて、いずれ倒産か売却の運命にあるとつばら評判になっていると伝えている。

カジノを含め、アトランティックシティの苦境はまだ続きそうであるが、同市の例からみると、カジノも、その所在する都市・地域の隆盛のいかに依存するものであって、逆ではない。つまりカジノは、あくまでも所在する都市・地域の繁栄を反映するものであって、カジノによって都市・地域の繁栄がもたらされると考えるのは、主客転倒したものである。

税収増加の目的でカジノを設けるというようなことなどは、以上の例からいえば、全く“時代錯誤”であり、“幻想”としか言いようがない。仮りにカジノを設けるとしても、それはあくまでも基盤である都市・地域の繁栄に役立つものであって、そのために必要ならば、補助金を出してでも行うぐらいの構えが必要である。祭礼などにおいて補助金を出しても露店が必要というのと同様である。

#### 【参照文献】

- A: Atlantic City, New Jersey (2014), Wikipedia: the Free Encyclopedia, www, retrieved January 10, 2014.  
 K: Kneesel, E., Baloglu, S. and Millar, M. (2010), Gaming Destination Images: Implications for Branding, *Journal of Travel Research*, Vol. 49, pp. 68-78.  
 M: Moufakkir, O. and Holeccek, D. (2012), Gaming in the USA: Historical Development, Controversies and Current Status, in: Moufakkir, O. and Burns, P. M. (eds.), *Controversies in Tourism*, Cambridge (MA): CABI, pp. 125-143.  
 N: The National Gambling Impact Study Commission: Final Report (and Executive Summary) (June 18, 1999), www, retrieved August 25, 2013.  
 P: Parry, W. (2013), Atlantic City Casinos Pressured to Improve or Face New Competition, www, retrieved January 31, 2014.  
 S: Stansfield, C. (1978), Atlantic City and the Resort Cycle: Background to the Legalization of Gambling, *Annals of Tourism Research*, April/June, pp. 238-251.  
 Q: 大橋昭一 / 竹林浩志 (2014) 「アメリカにおけるゲーミング事業の動向」『和歌山大学・経済理論』375号 (この論文は概要を次の形で再録発表している。大橋昭一 / 竹林浩志 (2014) 「アメリカにおけるカジノ事業の動向」『週刊トラベルジャーナル』2014年3月10日号、3月31日号に連載)